

<研究報告>

日英語の3人称代名詞の比較*

—英語の he と日本語の「彼」「自分」およびゼロ代名詞形の対応関係について—

小林 傑 岐阜県可児市立旭小学校
田中 江扶 信州大学教育学部言語教育講座

キーワード：人称代名詞，ゼロ代名詞，「自分」，定/不定，総称

1. はじめに

代名詞の基本的な役割は名詞の繰り返しを避けるために、「名詞の代わり」をすることである。しかし、英語と日本語では代名詞の用いられ方に違いが見られる。

(1) a. Everyone loves *his* mother.

b. みんなは彼の母親を愛している。

英語の3人称代名詞の he は日本語では「彼」と訳される。しかし、(1a)の *his* を(1b)のように「彼の」と訳すことはできない。(1a)の *his mother* は「それぞれの母親」という不特定の意味で使われるが、(1b)の「彼の母親」は特定の(=彼の)母親という意味にしかならないのである。このように、英語の代名詞の he は不特定の人を指せるが、日本語の代名詞の「彼」は特定の人しか指せない。(1a)を日本語に訳す場合は、「自分」かゼロ代名詞(=発音されない代名詞)を使う必要がある(以下では、ゼロ代名詞には「Ø」の表記を用いる)。¹

(2) みんなは { 自分の / Ø } 母親を愛している。

このように、英語の3人称代名詞の he は日本語の「彼」だけではなく、「自分」およびゼロ代名詞に対応することがわかる。本稿では、文中の先行詞を指す代名詞(=同一指示的代名詞)の he(his, him)と日本語の代名詞(=「彼」, 「自分」およびゼロ代名詞)との対応関

* 本稿は Kobayashi(2011)を修正したものである。初稿の段階で英語教育専修の大学院生の内田健太郎、仲谷雪、崔月弁の各氏および信州大学戦略 GP コーディネーターの安達佳与子氏から貴重なご意見を頂いたことに感謝申し上げます。また、信州大学外国人講師である Colleen Dalton 氏には英語の例文の判断をして頂いた上に、貴重な助言も頂いたので記して感謝の意を表したい。日本語の例文の判断には阿藤茜、上野大の両氏にも協力してもらった。なお、本稿にまだ残されているであろう不備や誤りは全て筆者らの責任である。最後に、本稿を完成させるまでに議論を重ねてくれた百瀬一紀氏に心からの感謝を捧げたい。

¹ ゼロ代名詞 (zero pronoun) : 省略された代名詞のことをゼロ代名詞という。英語では同じ名詞句の繰り返しを避けるために代名詞が使われるが、日本語では普通省略される。

(i) a. John loves *his* mother.

b. ジョンは { Ø / 彼の } 母親を愛している。

(ia)の英語と同じく、(ib)の日本語でも「彼の」という代名詞を使うことも可能であるが、代名詞を省略した方(=ゼロ代名詞)が自然である。さらに、次の対比を見よう(例文中の(??)は容認度が低いことを表す)。

(ii) a. John has broken *his* arm.

b. ジョンは { Ø / 彼の } 腕を折った。

(iia)にあるように、英語の場合は所有格を表す代名詞(=his)は省略できないのに対して、(iib)の日本語では所有格の代名詞(=「彼の」)は省略される。もし(iib)で「彼の」を使うと文の容認性がかなり下がってしまう。このように、日本語ではゼロ代名詞の方が好まれることがわかる。この点に関しては神崎(1994)を参照。

係から、日英語の代名詞の特徴を考察する。² (1)で見たように、**his** が「彼」とは訳せず、「自分」かゼロ代名詞を用いるしかない場合もある。そこで、2節では英語の代名詞 **he** が(i)どのような場合に、(ii)どの日本語の代名詞に対応するかを見ていく。3節では、2節の分類に基づき、日英語の代名詞の特徴について考察する。特に、日本語のゼロ代名詞が英語の代名詞に対応しているという **Kuroda(1965)**の主張に対して、ゼロ代名詞は日本語の代名詞のデフォルト形(=基本形)であることを示す。4節で本稿をまとめる。

2. 日英語の代名詞の対応関係

前節で見たように、英語の3人称代名詞 **he** は日本語の「彼」、「自分」およびゼロ代名詞に対応するため、論理的には8つの対応関係が考えられる。

表1 he と彼/自分/ゼロ代名詞の対応関係

	1	2	3	4	5	6	7	8
彼	×	○	×	×	○	×	○	○
自分	×	○	○	×	×	○	○	×
∅	×	○	○	○	○	×	×	×

* ○は「he と対応する」、×は「he と対応しない」ことを表す

以下では、上の8つのパターンに基づき、日本語の代名詞の特徴について見ていく。

2.1 逆行照応

パターン1は**he**が日本語のどの代名詞にも対応しない場合を表すが、これは統語的な理由によると考えられている。まず、次の例を見てみよう(例文中の下付きアルファベット(=index)は、両者が同一指示であることを表す)。

(3) Before John_i left home, Mary scolded him_i.

基本的には代名詞は先行する名詞(=先行詞)を指す。これを順行照応(forward binding)というが、(3)においても、先に出てきた **John** の代わりに後で代名詞の **him** が使われている。ところが、英語では代名詞が先行詞より先に出てくることも可能である(以下では、語句

² 代名詞の種類: 代名詞には対象物を直接指示する用法と間接的に指示する用法がある。この違いは3人称・単数・中性の代名詞においてははっきりと現れる。

(i) a. I'll get *that*.

b. I'll get *it*. (Gundel (1980: 139); 神崎(1994: 9-10)で引用)

(目の前に直接あるものを指す時は(i)a)のように *that* が使われるが、指し示すものがその場がない場合(=間接的に指示する場合は(i)b)の *it* が使われる。前者の場合は代名詞の先行詞が文中になく、後者の場合は文中にあることになる。(i)b)の *it* のように文中に先行詞のある代名詞を同一指示的代名詞という。次の(ii)の関係代名詞(*which*)も先行詞(*the book*)を指すという点で代名詞に分類される。

(ii) This is the book *which* I chose.

代名詞の詳細な分類に関しては Kempson (1988)を参照。

や例文の最初についているアスタリスク「*」は、その語句や文が非文法的もしくは非容認的であることを表す。

(4) a. Before he_i left home, Mary scolded John_i.

b. { *彼_iが / *自分_iが / *Ø_i } 家を出る前に、メアリーがジョン_iを叱った。

(4a)にあるように、英語では代名詞の **he** が **John** より先に出てきているが、**he** は **John** を指すことが可能である。これを逆行照応(backward binding)というが、(4b)にあるように、日本語では逆行照応は許されない。言い換えれば、(4a)の **he** に対応する日本語の代名詞がないことになる。よって、以下の一般化が得られる(cf. 神崎(1994: 116))。

(5) 日本語の代名詞は、逆行照応はできない。³

これに対して、順行照応の場合は英語の **he** が日本語の「彼」、「自分」およびゼロ代名詞のすべてに対応する(=パターン2)も可能となる。

(6) a. John_i saw a snake near him_i.

b. ジョン_iは { 彼_iの / 自分_iの / Ø_i } 近くでへびを見た。⁴

しかしながら、1節でも見たように、常に **he** が日本語の3つの代名詞すべてに対応するわけではない。例えば、(3)を日本語にする場合、**him** は「自分」とは訳せない。

(7) a. Before John_i left home, Mary scolded him_i. (= (3))

b. ジョン_iが家を出る前に、メアリーが { 彼_iを / *自分_iを / Ø_i } 叱った。

以下では、パターン3からパターン8を観察し、英語の代名詞 **he** が(i)どのような場合に、(ii)どの日本語の代名詞に対応するかという点を考察していく。

2.2 不定名詞と総称名詞

英語の **he** が「彼」と訳せないパターン3が1節で見た例である。

(8) a. Everyone_i loves his_i mother. (= (1))

b. みんな_iは { *彼_iの / 自分_iの / Ø_i } 母親を愛している。

ここでの特徴は先行詞に **everyone** という不定(indefinite)名詞が使われていることである。よって、以下のことがいえる。

(9) 先行詞が不定名詞の場合は「彼」は使えない。⁵

³ 所有格の逆行照応：代名詞が所有格の場合は日本語でも逆行照応が許される(Kuno(1986)等参照)。

(i) 太郎が彼女_iの新しい先生を花子_iに紹介した。

(ii) において「彼女」は先行詞の「花子」より前に出てきているが「彼女」=「花子」が成立する(=逆行照応が可能)。しかし、(i)の所有格(「彼女の」)を他の格に変えると逆行照応はできない。

(iii) *太郎が彼女_iに花子_iの新しい先生を紹介した。

⁴ 再帰代名詞(reflexive pronoun)：(6a)においては代名詞の **him** だけではなく再帰代名詞(=self 形)も可能である。

(i) John_i saw a snake near him_i/himself_i.

よって、(6b)の「自分」は代名詞の **him** ではなく再帰代名詞の **himself** に対応する可能性もある(2.3節を参照)。

⁵ 変項(variable)：不特定の人物を表す **everyone** のような語に対応する代名詞は変項と考えられる。変項を **x** で表すと、(8a)は以下の意味をもつ(cf. Pinker (1995), Culicover (2009))。

(i) すべての **x** について、**x** は **x** の母親を愛している。

(ii) の **x** は数学の変数のように(i)の内容(=式)を満たすものが入ることを表す記号である。よって、**x**=ジョンなら「ジョンはジョンの母親を愛している」となり、**x**=ビルなら「ビルはビルの母親を愛している」という意味になる。日本語では変項に対して「彼」ではなくゼロ代名詞(および「自分」)が使われるが、英語では変項に対しても **he** が使われる。この日英語の違いについては3節を参照。

さらに、英語の *he* がゼロ代名詞でしか訳せないパターン 4 は以下の例になる。

(10) a. *By the time the average American_i reaches the age of 70, he_i consumes 13 tons of beef.*

b. 平均的なアメリカ人_iが 70 歳になるまでには、{ *彼_iは / *自分_iは / Ø_i } 13 トンの牛肉を消費している。

(10a)では、主語に「平均的なアメリカ人」というようにアメリカ人全体のことを意味する総称(*generic*)名詞が使われている。⁶ この場合、*he* は「彼」だけではなく「自分」とも訳せない。よって、以下のことがいえる(*cf.* 神崎(1994: 111-119))。

(11) 先行詞が総称名詞の場合はゼロ代名詞しか使えない。

2.3 「自分」と主語先行詞条件

英語の *he* が「自分」では訳せないパターン 5 の例が(12)である。

(12) a. *Speaking of John_i, he_i is going to get married next month.*

b. ジョン_iについていえば、{ 彼_iは / *自分_iは / Ø_i } 来月結婚する予定です。上の例において「自分」が使えないのは、「自分」には(13)の主語先行詞条件(*Subject Antecedent Condition*)がかかるとされているからである(三原・平岩 (2006), 畠山(編)(2009)等参照)。

(13) 主語が「自分」の先行詞になれる。

(13)の条件は、以下の対比からも支持される。

(14) a. 太郎_iは花子を自分_iの部屋に入れた。

b. 太郎_iは花子_jが自分_jの部屋に入ったと言った。

(14a)では、「自分」は主語の「太郎」は指せるが目的語の「花子」は指せない。これに対して、(14b)では「太郎」と「花子」はそれぞれ動詞「言う」と「(部屋に)に入った」の主語であるため、(14b)の「自分」は「太郎」と「花子」の両方を指せることになる。このように、主語が「自分」の先行詞になれるという条件が(12)のパターン 5 につながるのである。⁷

ここで注意すべきことは、パターン 5 の逆のパターン、つまり、英語の *he* が「自分」でしか訳せないパターン 6 は論理的には可能であるが、実際には存在しないということである。実は、パターン 6 は再帰代名詞(=self 形)についてのみ当てはまる。

⁶ 総称：種全体を表す用法のこと。例えば「ライオンは危険な動物だ」という文においては特定のライオンについてではなく、どのライオンについても一般的に当てはまるという解釈になる。この総称用法は英語では無冠詞複数形で表されるのが普通である(例: *Lions are dangerous animals.*)。ただし、書き言葉では「総称の *the*」が使われる(樋口(2009)等参照)。

⁷ 「自分」と視点(*point of view*): 「自分」が使われる条件として視点が重要になってくることも指摘されている(三原・平岩 (2006)等参照)。次の対比を見てみよう。

(i) a. 太郎_iは自分_iを悪の道に陥れた女に復讐した。

b. *太郎_iは自分_iを殺した男と以前僕の家で会ったことがある。(久野(1987): 三原・平岩(2006: 66)で引用)
(ii)にあるように、亡くなった人が先行詞の場合は「自分」が使えない。これは「自分」が視点を有する先行詞をとる視点名詞であることを示している。つまり、(ia)では「太郎」の視点から女に復讐したことが述べられているため、「太郎」は視点を有する先行詞となり、「自分」が使えることになる。一方、(ib)では主語の「太郎」は死んでいるため「太郎」の視点から述べられた文にはならない。よって「太郎」は視点をもつ先行詞とはならないため(ii)は非文となる。「自分」の特徴については 3.2 節も参照。

(15) a. John_i saw *him_i / himself_i.

b. ジョン_iは{*彼_iを/ 自分_iを / *Ø_i} 見た。

(15a)にあるように、同じ文中の主語を目的語が指す場合は、代名詞の **him** ではなく再帰代名詞の **himself** が使われるが、この場合、(15b)にあるように、日本語では「自分」を用いるしかない。つまり、日本語の「自分」は再帰代名詞にも対応することがわかる(久野(1978)参照)。

2.4 ゼロ代名詞と不特定解釈

最後に英語の **he** に対してゼロ代名詞が使えないパターンを見ていく。まず、「彼」と「自分」のみ可能なパターン7の例として(16)が挙げられる。

(16) a. John_i didn't know the man who hit him_i.

b. ジョン_iは{彼_iを/ 自分_iを / *Ø_i} 殴った男を知らなかった。

高見(2001: 233)で指摘されているように、(16a)の **him** に対してゼロ代名詞を使った場合、先行文脈ではっきり特定できない限り、ゼロ代名詞は誰(何)でも指せてしまうため、先行詞が特定できないことになる。事実、(16b)でゼロ代名詞を使った文(=「ジョンは殴った男を知らなかった」)では、「男がジョンを殴った」という解釈ではなく「男が(ジョン以外の)誰か不特定の人物を殴った」という解釈しかでない。⁸

同様に、先行詞の解釈が定まらないためにゼロ代名詞が許されない文として、以下の例が挙げられる。

(17) a. John's dog bit him_i.

b. ジョン_iの犬が{彼_iを/ *自分_iを / *Ø_i} 噛んだ。

(17)は「彼」しか使えないパターン8の文であるが、ここでもゼロ代名詞を使った場合は、ゼロ代名詞は誰(何)でも指せてしまうため、先行詞が特定できない。事実、(17b)でゼロ代名詞を使った文(=「ジョンの犬が噛んだ」)では、「犬がジョンを噛んだ」という解釈ではなく「犬が(ジョン以外の)誰か不特定の人物を噛んだ」という解釈しかでない。

このように、ゼロ代名詞は先行文脈ではっきり特定できない場合は不特定解釈が優先するといえる。

3. 分析

本節では、2節の分類に基づき、日英語の代名詞の特徴について考察していく。まず、パターン2(=6)より、英語の **he** に対して日本語では「彼」、「自分」およびゼロ代名詞の3つの形が対応していることになるが、2.2節で見たように、先行詞の種類に応じて対応関係が異なる。具体的にいうと、(9)(=パターン3)と(11)(=パターン4)の一般化(以下、再掲)が挙げられる。

(9) 先行詞が不定名詞の場合は「彼」は使えない。 (例文(8)参照)

⁸ 「ジョンは殴った男を知らない」という文においては、「ジョンが男を殴った」という解釈も可能であるが、ここでの議論には関係しない。

(11) 先行詞が総称名詞の場合はゼロ代名詞しか使えない。(例文(10)参照)
以上のことをまとめると、表2のようになる。

表2 先行名詞と彼/自分/ゼロ代名詞の対応関係

先行名詞 \ 代名詞	彼	自分	∅
定(definite)	○	○	○
不定(indefinite)	×	○	○
総称(generic)	×	×	○

○は「対応する」、×は「対応しない」ことを表す

表2に示されているように、英語の *he* と同じく、定・不定・総称名詞のすべてにおいてゼロ代名詞が対応することから、Kuroda(1965)のいうように、日本語のゼロ代名詞が英語の代名詞に対応しているとも考えることも可能である。しかし、(i)ゼロ代名詞の代わりに「自分」と「彼」も使えるパターン(=パターン3とパターン5)や、(ii)ゼロ代名詞は使えないが「自分」と「彼」は使えるパターン(=パターン7とパターン8)があることから、必ずしも日本語のゼロ代名詞が英語の代名詞に対応しているとはいえないことがわかる。そこで、本稿では日英語の代名詞の特徴を以下のように考える。

- (18) a. ゼロ代名詞は日本語の代名詞のデフォルト形である。
b. 「自分」は「彼」とゼロ代名詞の代わりに用いられる。
c. 英語の代名詞 *he* は虚辞である。

以下では、(18)の主張の妥当性を検証していく。

3.1 デフォルト形としてのゼロ代名詞

日本語のゼロ代名詞の特徴は、英語の *he* がゼロ代名詞でしか訳せないパターン4と、逆にゼロ代名詞が使えないパターン7とパターン8に現れている。以下に、各パターンの例文を再掲する。

(10) a. By the time the average American_i reaches the age of 70, he_i consumes 13 tons of beef.

- b. 平均的アメリカ人_iが70歳になるまでには、{ *彼_iは / *自分_iは / ∅_i } 13トンの牛肉を消費している。 [パターン4]

(16) a. John didn't know the man who hit him_i.

- b. ジョン_iは {彼_iを / 自分_iを / *∅_i } 殴った男を知らなかった。 [パターン7]

(17) a. John_i's dog hit him_i.

- b. ジョン_iの犬が {彼_iを / *自分_iを / *∅_i } 噛んだ。 [パターン8]

2.2節で見たように、(10b)でゼロ代名詞しか使えないのは、先行詞が総称名詞(=平均的アメリカ人)であるからである((11)参照)。さらに、2.4節で見たように、(16b)と(17b)でゼロ代名詞が使えないのは、ゼロ代名詞が不特定の人物を指す解釈が優先されるからであった。ここで、総称名詞がある不特定の集団(集合)全体を表していることを考えると、ゼロ代名詞

の基本的な役割は以下のように考えられる。

(19) ゼロ代名詞は不特定の人物を指す。

ゼロ代名詞は代名詞の省略現象であるが、(19)は省略一般に見られる特徴である。

(20) a. He won the election/ the race/ the game.

b. He won the first prize/the gold medal/the blue ribbon.

c. He won.

(Fillmore 1986: 100)

(20a,b)にあるように、動詞 win は一般的な戦い(選挙や競走等)と具体的な物(賞やメダル等)を目的語にとることができるが、(20c)のように目的語が省略されると特定の物を勝ち取るという(20b)の解釈は出ない。言い換えれば、(20c)では総称的な意味での「戦い」に勝ったというか解釈しか出ないといえる。このことから、省略現象であるゼロ代名詞が不特定の人物を指すという(19)の主張は省略一般に関わるものであることがわかる。

これに対して、特定の人物を指すのが「彼」ということになる。これは、ゼロ代名詞が使えない(16)と(17)において「彼」を用いると「ジョン」という特定の人を指せることから明らかである。さらに、日本語の場合、「彼」は形容詞で修飾できる。

(21) 背の高い彼 (*背の高い \emptyset)

(21)にあるように、形容詞の「背の高い」によって代名詞の「彼」が修飾されている。形容詞に修飾されるのは名詞の特性であるため(例:背の高い男)、日本語の代名詞「彼」は名詞性が強いと考えられる(Kuroda (1965)参照)。これに対して、(21)のカッコにあるように、ゼロ代名詞は形容詞で修飾できない。このことは、「彼」とゼロ代名詞は対極の関係にあることを示している。ここで、(16)と(17)で見たように、特定の人物を指す「彼」と不特定の人物を指してしまうゼロ代名詞の対比も考慮に入れると、名詞性の強い「彼」が特定の人物を指す代名詞で、名詞性がないゼロ代名詞が不特定の人物を指す代名詞であるという結論が得られる。

(22) 日本語の代名詞

/	\
定	不定/総称
彼	\emptyset

このように、基本的には「彼」とゼロ代名詞は相補関係にあると考えられる。

では、なぜゼロ代名詞が定名詞句を先行詞としてとれるパターン2やパターン5のような場合があるのかという問題が起こる。この問題の答えとして、日本語ではゼロ代名詞がデフォルト形であるということが考えられる。次の例を見てみよう。

(23) a. ジョン_iは { 彼_iの / \emptyset _i } 近くでヘビを見た。(cf. (6b) : パターン2)

b. 太郎_iは, { *彼_iが / \emptyset _i } アメリカに行くのを望んでいる。

(23a)では「彼」とゼロ代名詞の両方が使われているが、「彼」の場合はジョンとは別の人の解釈も可能である(執筆者達の判断では、こちらの解釈の方が自然と思われる)。これに対して、ゼロ代名詞の場合はジョンしか指さない。つまり、「彼」とゼロ代名詞の両方が可能な場合でも、ゼロ代名詞を使うことで解釈の曖昧性が回避できることがわかる。さらに、(23b)のような文においては、「彼」は「太郎」を指すことはできず、ゼロ代名詞のみ許さ

れる。この理由について、高見(2001: 232)では、ゼロ代名詞で先行詞を指せる場合に **he** のような音形のある語彙代名詞を使うと冗長(**redundant**)であったり、意図する先行詞とは別の解釈が生じる場合があるとしている。⁹ 以上のことから、定名詞句を指す代名詞の「彼」を使うことを回避するような場合にゼロ代名詞が代わりに使われると考えられる。これは、ゼロ代名詞が日本語の代名詞のデフォルト形(=(18a))であるため、定名詞句の代名詞としても代用が可能であるからである。つまり、表 2 でゼロ代名詞が定名詞句に対しても使われているのは、代用されていることを表していることになる。

3.2 「自分」の代名詞としての特徴

前節の(22)にあるように、本分析では日本語の代名詞は「彼」とゼロ代名詞と考える。つまり、「自分」は(純粹な)代名詞とは考えず、限られた場合に代名詞として用いられるものとする。その根拠として2つのことが挙げられる。1つ目は、2.3節で見たように、「自分」には主語先行詞条件のような制約があるが、代名詞の「彼」にはそのような制約はないということが挙げられる。次の文を見てみよう。

(24) ジョン_iの犬が {彼_iを/ *自分_iを} 噛んだ。(cf. (17b))

(24)において「自分」が「ジョン」を指せないのは、(24)の主語は「ジョンの犬」であって「ジョン」ではないからである。「ジョンの犬が自分を噛んだ」という文の解釈は「ジョンの犬が自分自身を噛んだ」という解釈しか出ない。これに対して、「彼」の場合は主語先行詞条件のような制約はないため、「ジョン」を指せることになる。このように、代名詞の「彼」とは異なり、「自分」は限られた場合にしか代名詞として機能しないことがわかる。

さらに2つ目として、英語の代名詞 **he** に対して「自分」だけが使えるパターン 6 は論理的には可能であるが、実際には存在しないということである。2.3節で見たように、パターン 6 はあくまで再帰代名詞としての「自分」に当てはまるものであり、代名詞としての「自分」には当てはまらない。言い換えれば、「自分」は「彼」とゼロ代名詞が使える場合にのみ用いられることになる。よって、「自分」は「彼」とゼロ代名詞の代わりに用いられる(=(18b))と考えられる。

では、どのような場合に「自分」が代わりに用いられるのだろうか。この点に関しては本稿の目的から外れるため詳細な議論はできないが、「彼」と「自分」が使えるパターンとゼロ代名詞と「自分」が使えるパターンから示唆が得られる。¹⁰ まず、前者(=パターン 7)から見ていこう。

(25) ジョン_iは {彼_iを/ 自分_iを} 殴った男を知らなかった。(cf. (16b))

(25)では「彼」と「自分」の両方が使えるが、「彼」を使った場合はジョン以外の人も指せ

⁹ 代名詞回避(Avoid Pronoun)の原則：音形をもたないゼロ代名詞と語彙代名詞の両方が可能な場合、代名詞回避の原則により音形をもたないゼロ代名詞が好まれる(Chomsky (1982))。

(i) John likes { 'his_i / Ø_i } winning the race.

(i)では **his** も可能であるが、ゼロ代名詞の方が好まれる(**his** の場合は **John** 以外の人を指す解釈が優勢)。この代名詞回避の原則は「必要以上のことをいってはならない」という会話の原則(Grice (1975))からきている可能性も指摘されている。この点については高見(2001: 231-232)を参照。

¹⁰ 「自分」の特徴に関しては注 8 も参照。なお、「自分」についての詳細については廣瀬・加賀(1997)を参照。

てしまう。それに対して、「自分」を使うとジョンしか指せない。このように、「自分」を使うことで解釈の曖昧さを回避できることがわかる。次にゼロ代名詞と「自分」が使える例を見てみよう。

(26) 太郎_iは、{Ø_i / 自分_iが} アメリカに行くのを望んでいる。(cf. (23b))

(26)ではゼロ代名詞と「自分」の両方が使えるが、「自分」を使った場合は「他の誰でもなく自分(=太郎)がアメリカに行きたい」という対比的意味が明示される(高見(2001: 232))。つまり、「自分」を使うことで、先行詞を他の人物に対して強調できることになる。¹¹

以上のことから、「自分」は解釈の曖昧さを回避したり、強調したりする場合に代名詞として用いられると考えられる。

3.3 虚辞としての代名詞 he

以下の対比を見てみよう。

(27) a. If anyone_i calls, tell him_i I can't come to the phone.

b. 誰か_iから電話があったら、{*彼_iに / Ø_i} 今出られないと言ってくれ。

Pinker (1995)が指摘しているように、(27a)では不定名詞 *anyone* が先行詞として使われているが、それを受ける代名詞 *him* は何も指さない可能性もある。なぜなら、誰も電話をかけて来ない場合もあるからである。このように、誰も指さない可能性があっても、英語では代名詞 *he*(=*him*)が使われる。これに対して、日本語の場合は、(27b)にあるように、語彙代名詞の「彼」は使えず、ゼロ代名詞しか使えない。日本語のように特定の人物を指す場合(=「彼」)と不特定の人物を指す場合(=ゼロ代名詞)で異なる代名詞を使う言語もあるが、英語では両方の場合で *he* を使い、(27a)では単に目的語の位置を確保するだけのもの(=*placeholder*)として代名詞が使われている(Pinker (1995: 378-379))。このことは、英語の代名詞 *he* は虚辞であるという(18c)の主張を裏付けるものであると考えられる。¹² 虚辞であるがゆえに、(27a)では単に目的語の位置を確保するためだけに使えることができる。事実、英語には代名詞の虚辞用法は普通に見られる。

(28) a. *It* rained.

b. You can make *it*.

(28a)の *it* は天候を表す虚辞(*expletive*)であり、特定のものを指しているわけではない。また、(28b)の動詞 *make* の目的語の *it* も漠然と状況を表すだけで、特定のものを指しているわけではない。さらに、神崎(1994: 9)では、歴史的には英語の代名詞が繰り返しを避けるた

¹¹ 代名詞の強調：ゼロ代名詞の代わりに語彙代名詞が強調のために使われるのは他の言語でも見られる。例えば、イタリア語やスペイン語やチェコ語のような言語では動詞の語尾で人称と数を示すため、代名詞が省略可能である。以下はイタリア語の例である。

(i) (io) parlo 'I speak' / (tu) parli 'you speak' / (lei) parla 'she speaks'

そのため、あえて代名詞を使う時は代名詞が強調される(Haegeman (1991))。

¹² 英語の代名詞の虚辞性：3.1節の(21)で見たように、日本語の代名詞は形容詞で修飾できるが、英語の代名詞は形容詞では修飾できない(Bloomfield (1933))。

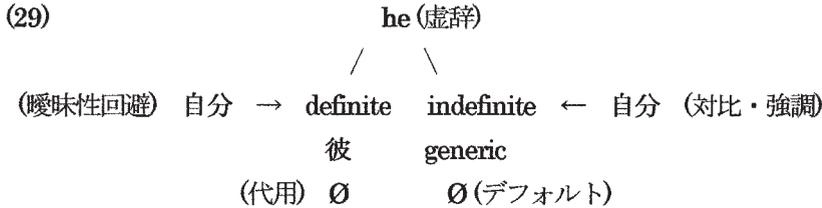
(i) a. 背の高い彼女 (*tall she)

b. 美しい日本の私 (*Beautiful Japanese I)

(ib)は川端康成のノーベル文学賞記念講演の題名であるが、エドワード・G・サンデンステッカーの英訳では、'Japan, the Beautiful, and Myself' (「美しい日本と私」)となっている(神崎(1994: 12))。

めに用いられる虚語(empty word)として発達してきたことが指摘されている。

以上のことから、英語の代名詞は虚辞であるため、定・不定・総称にかかわらず、同じ形式が用いられるといえる。ここでPinker (1995)は、英語では不定および総称名詞に対する代名詞をもっていないため、すべて he で代用していると考えているが、上述したように、本分析では代用されているのではなく、虚辞であるのですべての場合に使えると考える。よって、日英語の代名詞の関係は以下のように図示される。¹³



4. 結語

本稿では、英語の場合、先行詞が定名詞・不定名詞・総称名詞のどれであっても代名詞の he が使われるが、日本語の場合は定名詞句には「彼」、不定名詞・総称名詞にはゼロ代名詞が使われることを見た。また、英語では音形のある語彙代名詞が使われるのに対して、日本語では音形のないゼロ代名詞が基本(=デフォルト)であるのは、虚辞の有無に還元できることも見た。英語のように場所を確保するだけの虚辞が許される言語では、語彙代名詞が虚辞として使われるが、そのような虚辞を許さない日本語では音形をもたないゼロ代名詞が基本となるといえる(cf. Gundel (1980), 神崎(1994))。¹⁴ (29)にあるように、日本語では2つの形式を使うところを英語では1つの形式で表すというのは、他にも見られる現象である。例えば、英語の助動詞は通常2つの意味をもつが、日本語では違ういい方が使われる。¹⁵ 助動詞 will を例に見てみよう。

¹³ 日本語の代名詞：歴史的に見ても、今の日本語で使われている代名詞の「彼」「彼女」「彼ら」は明治時代以降に使われるようになったものである(神崎(1994)参照)。このことは、特に3人称においてはゼロ代名詞が基本形であることを示している。さらに、日本語では代名詞ではなく同一名詞句を繰り返し使うという特徴もある。以下の文は太宰治の『走れメロス』からの引用とその英訳である(神崎(1994: 31-32))。

(i) メロス₁政治はわからぬ。メロス₁は、村の牧人である。Ø₁笛を吹き、Ø₁羊と遊んで暮らして来た。

(Melos₁ knew nothing of politics. He₁ was a mere shepherd from an outlying village who spent his days playing his flute and watching over his₁ sheep.)

(i)にあるように、最初の2文では「メロス」が繰り返され、その後は省略(=ゼロ代名詞)が使われている。このように、日本語の場合、同一名詞句の繰り返しかゼロ代名詞が基本であるといえる。なお、(i)のや英訳に示されているように、英語の場合は必ず代名詞の he(his)が使われていることにも注意。

¹⁴ 言語のタイプ(Typology)：日本語のように代名詞を省略(=ゼロ代名詞を使う)言語には中国語や朝鮮語等が挙げられ、英語のように語彙代名詞を使う言語としてはドイツ語やフランス語等が挙げられる。その中間にある言語としてはアラビア語やトルコ語等がある(Gundel (1980)参照)。なお、この代名詞に関する言語分けが話題卓越(topic prominent)言語と主語卓越(subject prominent)言語の分類と関連することが指摘されている(神崎(1994:25)も参照)。

¹⁵ 助動詞の2つの用法：助動詞は文の主語について述べる根源的(root)用法と文についての話し手の判断を表す認識(epistemic)用法の2つがある。

(i) a. He can swim = He is able to swim. [root]

b. He can be a doctor. = It is possible that he is a doctor. [epistemic]

(ia)ではcanは主語のheについて述べており、「彼が泳ぐことができる」ことを意味している。これは(ia)がhe is able(「彼はできる」)で書き換えられることからわかる。一方、(ib)ではcanは「彼が医者である」ことに対して「あり得る」という話者の判断を表している。このことは、(ib)がit is possible(「あり得る」)で書き換えられることからわかる。助動詞に関しては安藤(1983)等を参照。

(30) a. I *will* do my homework tonight. (私は今晚宿題をする)

b. He *will* be a doctor. (彼は医者になるでしょう)

(30a)にあるように, *will* が意志を表す時は「する」と訳され, (30b)のように推量を表す場合は「でしょう」と訳される。つまり, 日本語では2つの異なった形式が英語では1つの形式で表されることがわかる。

(31)

will	
/	\
意志	推量
する	だろう / でしょう

さらに, *will* は未来を表す表現であるが, 意志を表すときは現在形の「する」が使われている。これは, 現在形が時制のデフォルト形であるからである(畠山(編)(2011)参照)。

(32) 彼は6時にレストランで夕食を食べる。

(32)では「食べる」という現在形が使われているが, 現在の習慣を表す現在形の解釈とともに, 「6時にレストランで夕食を食べる」という予定も表すことができる。つまり, 現在形が未来のことにも代用されるのである。このように, デフォルトのような言語現象一般に関わる概念から代名詞を捉えることで, 日本語や英語といった言語の違いを越えて代名詞を捉えられる可能性があると考えられる。

参考文献

- 安藤貞雄 (1983) 『英語教師の文法研究』 東京: 大修館書店。
- Bloomfield, Leonard (1933) *Language*. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- Chomsky, Noam (1982) *Some Concepts and Consequences of the Theory of Government and Binding*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Culicover, Peter (2009) *Natural Language Syntax*. Oxford: Oxford University Press.
- Fillmore, Charles (1986) "Pragmatically Controlled Zero Anaphora," *BLS* 12, 95-107.
- Grice, Paul (1975) "Logic and Conversation," in Peter Cole and Jerry Morgan (eds.) *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*, 41-58. New York: Academic Press.
- Gundel, Jeanette K. (1980) "Zero NP-Anaphora in Russian: A Case of Topic Prominence," *Papers from the Parasession on Pronouns and Anaphora (CLS)*, 139-146.
- 畠山雄二(編) (2009) 『日本語の教科書』 東京: ベレ出版。
- 畠山雄二(編) (2011) 『大学で教える英文法』 東京: くろしお出版。
- 樋口昌幸 (2009) 『英語の冠詞—その使い方の原理を探る—』 東京: 開拓社。
- 廣瀬幸生・加賀信広 (1997) 『指示と照応と否定』 東京: 研究社。
- 神崎高明 (1994) 『日英語代名詞の研究』 東京: 研究社。
- Kempson, Ruth (1988) "Grammar and Conversational Principles," in F. J. Newmeyer (ed.) *Linguistics: The Cambridge Survey II: Linguistic Theory: Extensions and Implications*, 139-163. Cambridge: Cambridge University Press.

- Kobayashi, Suguru (2011) *Comparative of the personal pronouns between English and Japanese*, Graduation thesis, Shinshu University.
- 久野璋 (1978) 『談話の文法』 東京: 大修館書店.
- Kuno, Susumu (1986) "Anaphora in Japanese," *Working Papers from the First SDF Workshop in Japanese Syntax*, 11-70.
- 久野璋 (1987) 『談話の構造』 東京: 大修館書店.
- Kuno, Susumu (1987) *Functional Syntax: Anaphora, Discourse and Empathy*. Chicago: University of Chicago Press.
- Kuroda, Shige-Yuki (1965) *Generative Grammatical Studies in the Japanese Language*, Doctoral Dissertation, MIT.
- Haegeman, Liliane (1991) *Introduction to Government & Binding Theory*. Oxford: Blackwell.
- 三原健一・平岩健 (2006) 『新日本語の統語構造』 松柏社
- Pinker, Steven (1995) *The Language Instinct*. New York: HarperPerennial.
- 高見健一 (2001) 『日英語の機能的構文分析』 東京: 鳳書房

(2011年10月11日 受付)

(2012年1月20日 受理)